

## 世界に影響を与えるアメリカ合衆国 —インターネット・映画からみる変化—

大分県立佐伯鶴城高等学校 石川明徳

## はじめに

内閣府の調査によれば、日本国民が最も親しみを感じる国は、多くの方々が想像する通りアメリカ合衆国（以下、アメリカ）なのだそうだ。日本が戦後追い求めてきた、あるべき姿がこの国であるわけだが、片思いが強いだけに見落としていることも多いように感じる。さまざまなアプローチが考えられるこの国の授業を、いかにもアメリカ的なインターネットと映画という視点から切ってみた。授業実践として『こうする』、『こう進める』という表現では、私自身の型にはめ込む感が否めないの、敢えて今回は『こういう資料があるのでは』的な表現にさせていただいた。

## 1. アメリカ合衆国の変化

アメリカは、2009年1月20日をもって劇的に変化を遂げた。それは誰もが知るとおり、バラク=オバマの米大統領の就任によってである。ワシントンで行われた大統領就任式には全米から200万人の民衆が集まったという。これは過去の歴史に例を見ない人数である。

出口の見えないイラクやアフガニスタンの状況もたらす国内の閉塞感を『Change』というキャッチフレーズがさわやかに吹き飛ばしたからこそ、期待感をもって大衆はワシントンに集った。就任演説もさることながら、彼が2004年7月27日の民主党全国党大会で行った基調演説は、変革をもたらす予兆として、今読み返しても鳥肌が立つ内容である。

“Well, I say to them tonight, there is not a liberal America and a conservative America -- there is the United States of America. There is not a Black America and a White America and Latino America and Asian America -- there's the United States of America.”

『さて、私は今夜、この世にはリベラルのアメリカも保守のアメリカもなく、ただ“アメリカ合衆国”

があるだけだと宣言しましょう。黒人のアメリカも白人のアメリカもラテン人のアメリカもアジア人のアメリカもなく、ただ“アメリカ合衆国”があるだけなのです。』

この言葉がアメリカの多民族社会の変化を象徴する決定的な言葉であるように思う。アメリカの現状を教える授業の導入に、これほど輝く言葉はなかなか見あたらない。

## 2. “eBay” にみる大統領選

WASPではない大統領が数少ない（8代：ブーレン、34代：アイゼンハウアー、35代：ケネディ、40代：レーガン）ことは、よく授業でも取り扱うところである。こと有色人種に関しては、前例がないだけに私も大統領予備選から注目してきた。民主党から大統領が出れば、それがバラク=オバマであれ、女性のヒラリー=クリントンであれ、歴史に大きく刻まれる大転換である。これはアメリカの民族問題を語るうえでこのうえない教材とばかりに、eBay\*にアクセスしてみると、あるわ、あるわ、選挙グッズの数々。しかもアメリカ国内のみならず、海外にまで発送可能ときている。ぜひ教材にと落札し、獲得することができた。

キャンペーン用のピンバッジのオークション価格を見てみると、興味深いことに気づいた。予備選の頃のヒラリー=クリントンとバラク=オバマを比較すると、明らかにバラク=オバマのそれが高価格で取り引きされているのである。このようなことから勝者がいづれになるかということは推測がついた。オバマ大統領は、まさしくネット時代の寵児である。また共和党のジョン=マケインとの争いでは、ずいぶんと接戦であったことを反映してか、価格差はほとんど見られなかった。



写真 選挙グッズ

\* eBay：世界で最も多く利用されているといわれているアメリカのインターネットの通信販売、オークションをあつかう会社。日本語のポータルサイトもあり、日本人向けのサービスもやっている。

名前(生年)	おもな出演作品	おもな役柄
シドニー=ポワチエ (1927年生まれ)	1963年『野のユリ』で、アフリカ系アメリカ人として初めて、アカデミー賞主演男優賞、ゴールデングローブ賞受賞。おもな作品『招かれざる客』『夜の大捜査線』など。	『野のユリ』では尼僧を手伝う青年を、『招かれざる客』では周囲に反対されても白人と結婚する黒人医師を、『夜の大捜査線』では差別と偏見の残る南部の町で偶然居合わせ殺人犯に間違えられる黒人刑事を演じた。社会的かつ人種差別に挑む役柄が多い。
デンゼル=ワシントン (1954年生まれ)	1989年『グローリー』で、アカデミー賞助演男優賞、2002年『トレーニング・デイ』で、アカデミー賞主演男優賞を受賞。おもな作品『遠い夜明け』『マルコムX』など。	『遠い夜明け』では反アパルトヘイト活動家を、『グローリー』では冷静でありながらも反抗的な元奴隷、『マルコムX』では、黒人解放活動家マルコムXを演じ、目的をもち、強く冷静に生きていく役柄が多い。
エディ=マーフィー (1961年生まれ)	2006年『ドリームガールズ』で、アカデミー賞助演男優賞にノミネート、ゴールデングローブ賞受賞。おもな作品『ビバリーヒルズ・コップ』『ナットゥー・プロフェッサー』など。	コメディアンであることから、コメディ映画に多く出演し、興行収入1億円以上の作品に多く出演している。『ナットゥー・プロフェッサー』では特殊メイクを駆使し、女性、老人や白人といった役柄をこなし、それぞれの人種や年齢の特徴をとらえた演技が評価されている。
ハル=ベリー (1966年生まれ)	2001年『チョコレート』で、アフリカ系アメリカ人として初めて、アカデミー賞主演女優賞を受賞。おもな作品『007 ダイ・アナザー・デイ』『X-メン』など。	『チョコレート』では夫と息子を失った絶望の淵から、同じように子を失った白人男性との交流をとおして立ち直ろうとする黒人女性を演じ、『007 ダイ・アナザー・デイ』や『X-メン』などでは、アクションシーンが多く、強く美しい女性を演じている。
ウィル=スミス (1968年生まれ)	2006年『幸せのちから』で、アカデミー賞主演男優賞にノミネート。おもな作品『メン・イン・ブラック』『ALI アリ』『ハンコック』など。	『ALI アリ』ではプロボクサーのモハメド=アリを、『ハンコック』では力加減のできない民衆に嫌われていたヒーローが、愛される真のヒーローを目指す姿を演じ、『幸せのちから』では事業の失敗によりホームレスになったが、最終的には成功を掴んだ男を演じている。

表 アフリカ系アメリカ人のおもなハリウッド俳優とおもな出演作品と役柄

### 3. 映画が教えてくれる多文化主義への道

さて、そのようにして成立したオバマ政権であるが、黒人（アフリカ系アメリカ人）大統領の誕生までが順風満帆でなかったのは知ってのとおりである。公民権獲得までの長い差別の時代、そしてその後も続く白人との間の貧富格差。多民族社会が徐々に変化してきた状況はハリウッドが取り扱う題材にみてとれる。1960年代初頭までの西部劇隆盛の時代においては、開拓時代のノスタルジーを追う風潮もあって、ネイティブアメリカン（アメリカインディアン）や黒人をおもしろおかしく映像化していった。騎乗した羽根飾りの彼らが独特の叫び声を上げながら駆けめぐる光景は、我々の年代にあまりにも強烈に焼き付いているが、これこそ彼らに対するステレオタイプ以外のなにものでもない。

60年代初頭からはシドニー=ポワチエが脚光を浴び、彼がアフリカ系アメリカ人として初のアカデミー賞主演男優賞を受けることで、以降の黒人俳優のイメージが一変する。黒人のヒーローがごく一般的な時代となり、ウィル=スミスを筆頭に、エディ=マーフィー、デンゼル=ワシントンなどハリウッドの頂点に君臨する歴史も多い。

ただ作品を冷静に見てみると、彼らヒーローのパー

トナーたるヒロインは、残念ながらあいもかわらず同じ黒人であることが多かったり、ハル=ベリーがアカデミー賞主演女優賞を獲得するまでシドニー=ポワチエから38年を要したりと、かつてMelting potといわれた社会の実態が、サラダボウル、あるいはモザイクといわれるほうが適当とされるころへとつながっている。

ただ、しだいに民族の融合を意識したような作品が



『図説地理資料 世界の諸地域NOW 2009』 p.129



現れてきていることも事実で、『ボディガード』のケビン=コスナーが警護するのがアフリカ系アメリカ人女性のホイットニー=ヒューストンであったり、『ウィンド・トーカーズ』では、ニコラス=ケイジはネイティブアメリカンに敬意を払う。内的にはずいぶんと融合のはかられてきたアメリカ社会であるが、対外的にはつねに敵対する対象を求めてきた国家でもある。

#### 4. ふたたび“Melting pot”へ

映画というメディアは、古くからプロパガンダの媒体として積極的に利用されてきた。第二次世界大戦中や、東西冷戦の時代はもちろんのことであるが、その後の時代においても反米体制とくにイスラーム社会を敵視するような作品が多く見られる。

そのような政治的宣伝の一方で、映画はアメリカ的価値観の流布媒体としても、大きな影響力を持った。大量生産・大量消費に裏打ちされた社会は、世界の多くの国の価値観のスタンダードとして、浸透していく。摩天楼は、アメリカ的グローバリズムの流れに乗った国ならばどこでも見られるものになり、本国のそれを超えるべく高さを競い合うのである。

当然ながら本家本元の、経済と文化の中心、かつ強大な軍事力に裏打ちされた、世界のリーダーである、強いアメリカ（という幻想？）の輝きは失せることがなかった。したがって多くの移民が、その輝きを我がものにするべく流れ込んできていた。彼らは低賃金で雇用され、アメリカのあらゆる分野においてその成長に貢献してきた。

ところがその輝きにかけりが見え始めた。そのきっかけが9.11（アメリカ同時多発テロ事件）であったか



『世界を学ぶ高校生の地理A 最新版』p.88  
①移民たちの宣誓式

どうかは定かではない。ただ確かなのは、9.11が、この世にはアメリカ的価値観と対極の考え方があるということを経済中に知らしめたことである。繁栄の象徴たる世界貿易センタービルが倒壊したとき、アメリカの価値観は大きく揺らいだ。だからこそ9.11を描いた映画『ワールド・トレード・センター』でも『ユナイテッド93』でも、イスラーム社会を挑発するような表現が見られない。『ユナイテッド93』では、ハイジャックを行動に移すまで、ひたすらコーラン（クルアーン）を誦んじ、祈りを捧げるテロリストが描写される。従来の作品であれば、“テロリスト＝冷血で無条件に悪”という設定が主流であったように思うが、この映画では、彼らの人間性にまで踏み込んでいるように感じられる。ドキュメンタリータッチだから当然なのだが、それぞれの存在を冷静に描き、どう選択するかは受け取る側の判断にまかせられている。イスラーム世界やその他対極にある世界を、今後ハリウッドがどう描くかはこの作品だけでは断定できないが、ひとつの視点として今後増えていくであろうことは想像にかたくない。

9.11から続く対テロ戦争で疲れ果てたアメリカに追い打ちをかけるように昨年のリーマン・ショックに始まる金融破綻がおり、自動車メーカーBIG3の経営危機が続いた。アメリカの価値観、豊かさの象徴の大きな一角を担う自動車業界が崩壊し始めたからこそ、大衆は『今までどおり』が通用しない時が流れ始めたことと察知した。『今までどおり』ではないという、その流れによってバラク=オバマ米大統領は誕生した。さっそく環境対策や、これまで対立関係にあった諸国に対する対話路線に大きくシフトした政策を打ち出し始めている。今後の世界動向を大きく左右する国だけに、その方向性に注目したいところである。

#### おわりに

eBayが、大統領選をきっかけに教材の発掘現場になるとは想像もしなかった。ピンバッジを胸一杯につけて教室に向かう私を、生徒はニヤニヤしながら見たものである。おかげでずいぶんと政治的関心を喚起できたのか、『オバマが勝ちましたね』とか、『ヒラリーの方がよかった』とか声をかけてくれた。彼らがそうやって世界に目を向けてくれるのなら、一見バカバカしい投資も価値あるものになる。次は車でも輸入してみようか。